

書 評

『キリン解剖記』
(郡司芽久著 ナツメ社)

服 部 由季夫

この書に書かれていることは、キリン好きの著者の、学位取得までの9年間の過程である。謂わば、それだけでもいえる。そして学位論文の内容は、キリンの第一胸椎は、第八頸椎ともいえるような可動を伴っているということである。それを説明するために、著者は、大学1年生の時から、修士、博士課程と30体ものキリンの解剖を行った。以下に、本書を勧めるその訳を述べる。

著者である郡司芽久は、キリンが大好きである。好きというのは、理屈ではない。絶対である。筆者にはメディアで偶に遭遇する愚問がある。例えば、子どもが空手道場に通っていて、とても喜んでいるように見える。メディアのインタビュアーの「空手が好き？」という質問に嬉しそうに「うん」と答える。その後の質問は「空手のどこが好き？ どこが面白い？」極めて愚問である。愚問に対して子どもは無理やり「友達が出来たから」とか「型が面白いから」等と答える。そうでないであろう。友達ができる習い事はいくらかでもあるだろうし、型は多くの武道に存しているのだから、空手である必要もないだろう。感情や想いを言語化したり記号化したりすることがすべて無意味とも思わないが、子どもへのこういった質問は、全く愚かだと思ふ。著者は物心つく以前の1歳半頃からキリンが好きだったようである。理屈ではない。好きは絶対である。好きを貫いている著者は素晴らしい。その「好き」が、研究者としての郡司の原動力となっている。そして本書には、キリンへの愛が随所に見られる。

筆者は、生理学や体づくり運動を指導する立場にあるが、そうした者からすれば、ヒトの頸椎が7つあること、そして概ね全ての哺乳類の頸椎が7つであることは、かなり常識的な情報である。キリンのように長い首、コウモリのように小さい哺乳類、胴体と首の区別がないような猪も、頸椎の数は7つである。無数に存する哺乳類において頸椎が7つでないものは、3種だけである。キリン好きの著者は、キリンが水を飲む姿勢に気づきを得た。ここから学位論文の主テーマであるキリンの第1胸椎が頸椎のような動きをすることへと繋がる。自らの動きを顧みれば分かるはずである。首は全く自由に上下左右に動く。しかし肋骨がある胸椎の動きは極めて少ない。人の胸椎はほとんど動かないのである。ところが、キリンの第一胸椎は頸椎のように可動することが分かったのだ。

今日の生理学や生物学において、マクロな研究テーマはかなり難しい。本書に書かれているように、その分野の研究のテーマの主流は分子である。したがって骨の動きが学位取得に至るとは、なかなか考えられない時代なのである。東京大学に入学した著者は自身の研究の

方向性を模索する中で、動物の解剖に行き着く。著者はキリンが好きであるが、そもそもそうした解剖学的な興味を持っていたわけでもない。キリンが好きであるが、当初はキリンの何を研究すべきかは明確ではなかった。好きを追求しつつ、それを生かす道を探していたのであろう。次第に「キリンの解剖」が出来るか否か、それが著者の関心の焦点になっていった。そしてキリンの解剖の可能性のある研究室に至るのである。

ここで面白いのは、研究室の教授から教わったことは「メスの握り方」だけであったということだ。その後は、実践の中での試行錯誤が始まった。死んだ動物は「解体」もしくは「解剖」して骨の標本とする。動物の解剖学においては、この本によれば「解体」と「解剖」には明確な違いがあるようである。東大の学生が動物を「解体」する作業においては、例えば筋の構造や起始停止を把握して行っていると、私は思っていた。ところがそうではないのだ。解剖学的な理解を伴わない場合は「解体」であり、理解を伴っている場合は「解剖」なのだそう。解剖学的な理解も実践の中で学んでいくのだ。解剖学的な理解があまりないうちは「解体」であり、ある程度解剖学的な知識が身に付き、謂わば学術的に解体できるようになると即ち「解剖」となる。「解体」と「解剖」は、専門的な研究室では、明確な線引きが為されているようである。そして著者のキリンの首の解剖は、正に悪戦苦闘であった。

そして、キリンの解剖が出来るといっても、研究室にキリンの解剖に精通している人がいたわけではなく、だからこそ試行錯誤から「解剖」に至ったようである。著者自身書いていることだが、世界で最もキリンを解剖している研究者になったようである。その根底には、やはり「好き」ということがあるのである。逆に、好きでなければ、キリンの解剖が全ての予定を凌駕するような生活は、例えばそれで学位の取得が保証されているとしても、難しいはずである。それは以下の通りである。

動物の解剖は、死んだ動物が対象となる。動物園などで大切に飼われていた動物が、時として寿命で、時として止むを得ず死んだものが対象である。そして、動物が何時死ぬかは分からない。日本中にある動物園にいるキリンが死んだ時が解剖のチャンスである。著者はクリスマスでも正月でも、その時にキリンが死ねば、解剖が最優先される生き方をしている。キリンの解剖には、概ね一週間かかる。したがってキリンが死ぬと、一週間の予定を全てキャンセルするのだ。

本書を読んでいるうちに、著者はキリン好きを、学術的に追及しているだけなのではないかと思えてくる。その他にも、本書では、キリンや動物に関わる蘊蓄が登場している。読んでいて、それも面白いし、勉強になる。

本書は今後研究者を志す若き研究者の卵から、動物好きの方々、理由は分からないが何らかの好きなことがあるの方々にお勧めである。何より単純に読み物としても、本当に面白い。そして、大好きなキリンに研究者として、職業人として関わっている著者を、「いいなあ」と率直に感じる。そして純粋な想いは、けだし報われるものだと思うざるを得ない。絶対にお勧めの一冊である。